

カトリック教会における多言語・多文化環境の実態

－三重県伊賀市の事例－

Multicultural and multilingual environment in Catholic church

－Case study of Iga city, Mie prefecture－

オチャンテ 村井 ロサ メルセデス・オチャンテ カルロス

Rosa Mercedes Ochante Muray, Carlos Ochante

要旨 (Abstract)

本論文では日本のカトリック教会にニューカマーがやってきてからどのように変化したのかを論じる。ニューカマーの増加が教会での信者数へ影響し始めたのは90年代である。その後、外国人集住都市と呼ばれる地域の教会では主にブラジル人、ペルー人、フィリピン人などのカトリックコミュニティ（共同体）が誕生し、数十年の歴史を持っているものも多い。ニューカマーの増加によって多民族化した教会ではミサなどの行事が多言語で行われるなど様々な対応と支援が行われている。本論文で対象にした伊賀市カトリック教会はこれまで多文化共生を課題に発展したケースであり、成功例でもある。

キーワード：(多文化環境) (多言語) (ニューカマー) (宗教) (カトリック教会)

I. はじめに

入管法が改正され、出稼ぎ現象が始まった90年から27年経った今、90年代に来日したニューカマーの中に、家を購入したり、家族と一定の所でコミュニティを作ったり、デカセギから日本に移民として定住し、子どもや孫と第三世代で生活している家庭も多い。2008年のリーマンショックや、東日本大震災そして原発事故で帰国した外国人が多く、平成20年度から減少傾向に向かっていたが、ブラジルの経済の悪化と政治的不安定な状態から再来日している人が増えつつある。そのため、平成28年末のブラジル人（180,923人）・ペルー人（47,740人）の在留外国人数⁽¹⁾が平成20年末以降初めて増加傾向にある。また、在留資格が大きく制限されていたことから入国が難しかった日系4世のため、政府が日系4世の定住者在留資格を「前向きに検討」していることから、今後の日系4世のブラジル人、ペルー人が来日・再来日するようになるのではないかと予測できる。

90年代では、デカセギとして見知らぬ日本での適応するため、またコミュニティ、ネットワークが形成されるまでに、支援を求める所として地域の日本語のボランティアグループ、NPOなどがあるが、クリスチャン国であるフィリピン、ブラジル、ペルーの場合、カトリック教会を探し求めることが多い。十字架に架けられたイエズスの御像、聖母マリアの御像という建物の構造への安心感、またそこで行われる儀式、同じエスニシティを持つ者と交

(1) 平成28年末現在における在留外国人数

流できる身近な場となっている。

90年後半ブラジル人、ペルー人の増加に伴い、元々日本に存在していたプロテスタント教会やカトリック教会以外のさまざまなキリスト教新宗派も現れるようになった。それらの宗教活動を通してコミュニティが形成するようになり、集団形成が進むようになった（樋口、1998）。

ニューカマー研究の多くは労働問題や子どもの教育問題が中心となっているが、ニューカマーと宗教、教会と在日ブラジル人の関係を中心とする研究、共同体作りや新宗派の実態についての先行研究が増えつつある。（星野2011、2016、山田2008、2010）。

カトリック教会における多文化や多言語についてや、出稼ぎ現象がもたらした新宗派の実態については、これまで調査や先行研究が少ないが、本研究では、カトリック教会における多言語・多文化環境の実態について挙げ、「多文化共生」としての教会、エスニシティ継承を促す場としての教会という観点から考察していく。フィリピン系の事例をあげた高畑（2016）によれば次世代へ民族文化や言語を継承する場所が家庭や教会以外にほとんどないと述べている一方、三浦（2015）の研究ではエスニックアイデンティティはエスニック教会と家庭内で形成されると明らかにした。このことから本研究では、他のプロテスタント教会や、福音派教会に比べると多言語、多文化環境が整っているカトリック教会に焦点を当て、筆者が来日してから生活し、関わってきた三重県伊賀市の教会の事例から研究を進めることとする。

筆者らは2014年から伊賀市でのカトリック教会以外の新宗派教会の実態を調べているが、ブラジル人中心の教会やペルー人中心の教会となっている多くの福音派教会に比べると、唯一、多文化接触、交流、多言語での活動が行われているのがカトリック教会である。

デカセギ現象が始まってから27年経っている今、カトリック教会は外国人の信者と共に、変化してきた。日本人の信者が減少し、所によっては外国人信者の数の方が多い。お客さんとして訪れていた教会から役員となったり管理するようになったりしているところも増えている。多国籍の信者が接触することが多いため、文化の違いによる対立や葛藤があるが、国際交流的なイベント、国際ミサ、金銭的、精神的な支援やサポート、子どもたちの信仰教育、母国語、文化継承や居場所を与えるなど多岐にわたる支援を行っている教会である。白波（2015）によれば「カトリックは他宗教と比較して在日外国人との関わりについて明確な方針をもっており、多文化共生のアクターとしての自負も大きい」と述べている。カトリック教会の「カトリック」の語源は“katholikós”というギリシア語で「普遍的」という意味から、外国人の受け入れ、多文化共生の最先端としての教会の意義を知る必要がある。そして今後増え続ける在留外国人との共生のため様々なヒントが得られるのではないかと考えられる。

II. 研究方法

1. 調査概要

2014年12月から2017年7月にかけて、三重県伊賀市での実態調査を始めとして、2014年からはブラジル・ペルー人にアンケート調査を行なった。また伊賀市内のプロテスタント教会の牧師、カトリック教会の主任司祭、各共同体のリーダー（日本、ブラジル、ペルー、フィリピン）、三重県を管轄する京都教区のラテンアメリカ司牧司祭にインタビューした。またカトリック上野教会の外国人信徒の歩みを知るために、教会が発行している「教会だより」を一番古いものだった1997年から参考にして、外国語のミサやイベントについて調べた。

インタビューを行った主な場所は、教会等であるが、日本にいない司祭や引っ越しで三重にいない人に対してはインターネット、電話やメールで連絡を取った。三重県の伊賀市は筆者が来日してから過ごした地域であり、在留

外国人数が市民の5%を占めているため、外国人児童生徒の教育に関する研究、フィールドワークの対象にすることが多い。そのため、インタビューした全ての方は、定期的に代わるプロテスタントの牧師以外、筆者の知り合いであった。またカトリック教会に関して、筆者が学生時代から子どもの信仰教育のリーダーを行い、来日当時から両親と共に通っていた教会である。カトリック教会の多文化共生や、エスニック祭りのために今まで、様々な大学の研究者や学生を受け入れ、研究への協力をしたことはあるが、実際に筆者がカトリック教会の実態や、上野教会がニューカマーの受け入れの歴史をまとめるのは初めてである。研究者そして当事者として研究ノートをまとめることにした。

2. 調査対象者

本研究では、主にカトリック教会関係者のインタビュー、そしてニューカマーにとっての宗教の意識についてのアンケートの一部を利用する。教会の実態を知るため、福音派教会についても述べることとする。

表1 アンケート調査を行った伊賀の教会

	①カトリック教会	②キリストの使徒教会	③アビバメント・ダァ・フェ福音教会
ブラジル人	23人	なし	55人
ペルー人	53人	32人	なし

3. 調査対象地伊賀市について

東海地方にある三重県には、自動車関係の下請け会社や食品製造業の工場が多く、90年代から派遣会社に登録したデカセギ労働者が生活するようになる。2004年に上野市・阿山郡伊賀町・島ヶ原村・阿山町・大山田村・名賀郡青山町が合併して伊賀市が誕生した。現在2017年7月末の伊賀市在住外国人数は4,640人で93,277人である総人口の約5%は外国人住民である。第1はブラジル(2,025人)、第2は中国(620人)、第3はペルー(452人)、第4はベトナム(401人)、第6はフィリピン(274人)⁽²⁾である。言語別で見ると、ポルトガル語、中国語が続き、スペイン語(ペルー、ボリビア、アルゼンチン、メキシコ)を母語とする人は536人である。

93年から発足した「伊賀日本語の会」や、外国人を支援する「NPO伊賀の伝丸」、「伊賀市国際交流協会」や、2017年から「伊賀市多文化共生センター」など、外国人にやさしい日本語が含まれる多言語対応サポート等、90年代から多文化共生に力を入れている町である。

また15年前から外国人児童生徒とその保護者のための「進路ガイダンス」の開催、毎週土曜日外国人児童生徒のための「学習支援教室」などを開いており、外国にルーツを持つ子どもたちの進学率は90%である。

町にエスニック店が多数あり、多言語標識、外国人同士のネットワークができているものの、宗教関連以外の大きなコミュニティや組織はない。様々な国籍の外国人と日本人が自然に共存している、学校、行政、地域のボランティア、教会などによって連携が出来ているようである。

⁽²⁾ 伊賀市国際交流協会 伊賀市在住外国人の現状(2017年7月末) <http://www.mie-iifa.jp/>

表2 調査対象者教会

	①カトリック教会	②キリストの使徒教会	③アビバメント・ダアフェ福音教会
設立	カトリック上野教会：1950年代 90年代からブラジル人、ペルー人が通いはじめる。	日本で誕生、2000年→Iglesia mensajera de Cristo(キリストの使徒教会)という名前をつけ、本格的な活動を始める。	日本では1996年に愛知県一宮市で設立。伊賀市では2000年に教会を作る。
リーダー	上野カトリック主任神父、各国の共同体のリーダー	牧師(夫婦)	牧師、宣教師(夫婦)
信者の国籍	日本、ブラジル、ペルー、フィリピン、ベトナム等	主にペルー	主にブラジル
信者数	約200人(全国籍合計)	約60人	約60人
ミサや礼拝日	スペイン語、ポルトガル語、英語など各言語のミサが月に1~2回程度行われる。土曜日(夜19時半)・日曜日(朝9時)	礼拝日:土曜日(21時~23時半) その他(月・金・日)	礼拝日:火曜日、土曜日、日曜日(夜8時)
活動	聖書の勉強と分かち合い、青年会、家庭集会、子どもの勉強会	聖書の勉強、青年会、婦人会、男子会、子どもの勉強会	聖書の勉強、婦人会、男子会、青年会など
教会の維持	登録されている信者が、維持費を出す。登録されている南米出身の信者は少ない。ミサ献金。	信者登録がまだ行われていないが、所属している信者であれば、維持費を出す(十分の一税)、献金。	信者登録を行っている信者が維持費を出す(十分の一税)、献金。

Ⅲ. 日本のカトリック教会とニューカマー

カトリック教会は、ローマ教皇である「フランシスコ教皇」を中心としたキリスト教の一大宗派であり、「教皇庁年鑑2017年版」および「カトリック教会統計2015年」では、世界のカトリック信者数は約12億8千5百万人⁽³⁾であると言われている。これは総人口の17.7%に相当する。その中でアメリカ大陸は洗礼を受けたカトリック教徒の約49%を所有している大陸である。中でも、ブラジル(1億7千220万人)の信者数世界中一位を示し、次がメキシコ(1億1千90万人)、フィリピン(8千360万人)と続いている。

日本の教会は16教区から成り立っている。各教区にバチカンが任命した司教はその教区長となり、このうち大司教区として東京、大阪、長崎の3ヶ所に分けられ大司教が任命されている。

筆者が対象としている所は、「京都教区」の小教区であり、三重県の伊賀市にある教会である。この京都教区は京都、奈良、滋賀、三重の四県で一つの教区が成り立っている。

90年の入管法が改正されてから、カトリック人口の割合約65%であるブラジル(2010年)、そして約80%(2007年)⁽⁴⁾であるペルーから多くのニューカマーが教会を訪れるようになる。

これに伴って93年に「日本カトリック司教協議会社会司教委員会」では「国籍を越えた神の国をめざして」とい

⁽³⁾ El Anuario Pontificio 2017, y el “Annuarium Statisticum Ecclesiae” 2015, 06.04.2017「教皇庁年鑑2017年版」および「カトリック教会統計2015年」<https://press.vatican.va/content/salastampa/es/bollettino/pubblico/2017/04/06/ter.html>

⁽⁴⁾ 文化庁文化政策課「在留外国人の宗教事情に関する資料集」-東アジア・南アメリカ編-平成26年3月

うメッセージを発表した。2016年に改訂版が出され、奉仕する使命がある教会としての対応など共生を呼びかけた。

「移住する、旅をする教会」としてイスラエルの民が歩んだ救いの歴史や、ヘロデ王の幼児虐殺から「生まれたばかりのイエス」を守るためエジプトへ移住する「聖家族」（聖母マリア、聖ジョセフ、イエス・キリスト）など、

祖国を離れ、移住することは聖書の様々な箇所があり、また宣教のために外国に出ることなどから、受け入れる、そして派遣することに対してある程度の理解があると考えられる。この日本の教会に出されたメッセージの中に「日本の教会は、けっして日本人だけの教会ではありません。その意味で難民移住移動者を歓迎するにとどまらず、さまざまな違いを超えて、ひとつの共同体をつくり上げていく努力によってこそ、普遍的な教会をあかすことができる。」と記されている。「違いを超え」、教会共同体の「多様性による豊かさ」を感じるように呼びかけている。また教会独自の課題では、「日本の教会が、多国籍・多文化の共同体であることをあかすできるようにさらに努力する」。「外国籍信徒が積極的に典礼や秘跡に参加できるように、彼らの信仰表現を尊重しながら共同体としてふさわしいあり方を築いていく」。「国籍にかかわらず小教区の一員である、できるだけいずれかの小教区に籍を置くことができるように働きかける」など挙げている。

現在の外国籍信徒の実態に関し、教区や小教区によって行われている対応は異なる。外国人が集中している都市では、外国語のミサが行われたり、教会での外国人信徒の活動、参加があるものの、小教区に籍を置くことや日本人信徒と同じように毎月維持費を出すことなどが課題となっている。維持費を出す文化が異なるため、教会でのイベントで屋台や抽選会を企画しながら教会の維持をサポートするための資金提供を募ることがある。また主日のミサに行われるミサ献金の場合、普段数百円出す日本人信者に比べると千円を出す習慣がブラジル人信徒に多い。この違いについて京都教区の司教が在留外国人と日本人の維持費を出す文化の違いについて教区の役員会議で日本人に説明していた。その違いを認めた上で、外国人信徒も日本のカトリック教会や日本人信者の習慣を理解し、インテグレーションをするようにと呼びかけている。

以下に伊賀市のカトリックの実態をあげることにする。

IV. 90年代からの上野教会の歴史（多言語教会への歩み）

外国人が増え始めた当初は日本語のミサに参加するのみであった。91年に来日した信者の語りでは、「外国語のミサもなく、ただ日本語のミサに預かり、ミサが終わるとすぐに帰りました」。94年にフランス出身の神父が主任司祭となり、外国からの信者が多いことからスペイン語を勉強し始め、簡単な会話ができるようになり、中南米の信者と交流を持つようになった。ペルーやブラジルからの信者が10名近く集まるようになってから、外国人の中でまとめ役の人を探し、ミサの前半の「言葉の典礼」の部分は御聖堂の隣にあるホールで自分たちの言葉の聖書を読んで、司祭の説教の代わりに、ペルーやブラジルでカテキスタをしていた信者が、ペルー人やブラジル人の信者に聖書について触れ、分かち合い、ミサの後半の部分の「感謝の典礼」から日本語で行われているミサに参加して、日本人の信者と共に、共同祈願、平和の挨拶や聖体拝領を行い、ミサの最後までそこに参加していた。このような形から、ただ参加するミサから、前半の部分、ラテンアメリカ出身の信者が一つに集まって、少しずつ共同体が作られるようになっていった。

99年に司祭が転出、1年間は主任司祭がいなくなり巡回して他の町から司祭が来るようになった。2000年にアイerland出身の司祭が主任司祭となり、この司祭は奈良で主任司祭をしていた時、「挨拶程度のスペイン語しかできなく、ある日ラテンアメリカ出身の男性にスペイン語で挨拶して、その信者が嬉しそうにスペイン語で話しかけられた。しかし自分が挨拶程度のスペイン語しか分からなく、対応できなくて、挫折した彼らの顔を見て、頑張っ

てスペイン語を覚える決心をした。」と語った。上野教会に赴任した頃にはスペイン語を話せるようになっていた。この司祭と共に、2001年の10月に初めてブラジルの保護の聖母「アパレシダの聖母」のミサと、ペルー人の「Señor de los Milagros 奇跡の主」のミサが伊賀で行われた。

そして2002年1月から正式に第3土曜日の夜19時半からスペイン語・ポルトガル語の合同ミサを行うことになった。このミサでは、スペイン語とポルトガル語の賛美歌を入れて、ブラジル人とペルー人そして外国人をサポートしていた日本人が数名参加していた。

その後、2003年6月に初めての「フェスタ・ジュニ-ナ」というブラジルの6月の祭りが開催され、同じ年の10月から平日の夜でも教会で聖書の勉強会を開いて、活動が増えるようになった。

2004年に、司祭が変わり70代の日系アメリカ人が主人司祭となり、スペイン語は少しできていたが、ポルトガル語がわからなかったため、3ヶ月の休暇をとり、ブラジルに語学留学をした。

2007年にはブラジルのサンパウロ州のブラガンサ・パウリスタ教区から京都教区の招聘の下でブラジル人の信仰をサポートするため司祭が来られ、上野教会で生活するようになる。この年から第1土曜日にスペイン語のミサ、第3土曜日にはポルトガル語のミサが行われることになった。

又、土曜日のミサに加えて、日曜日の午後にブラジル人司祭の司式でポルトガル語のミサを行うことになった。この司祭は日本での生活になれず一年後に帰国することになり、ラテンアメリカ司牧担当司祭のペルー人司祭が日曜日のポルトガル語のミサを担当するようになる。この司祭はアメリカの宣教会「メーリノール会」から招聘され当初の計画として5年の間、日本のスペイン語圏司牧をサポートするため94年に来日した。日本語の勉強のため、京都に滞在し、京都教区の滋賀、三重のラテンアメリカ共同体を訪問し始めた。「最初ペルー人が多い関東に行くつもりだったが、京都教区の司教との話し合いで京都教区に残ることにした」。ポルトガル語を話す司祭が不在、そしてブラジル信徒が多かったため、ポルトガル語を覚え、ブラジル人司牧、ペルー人司牧を合わせた「ラテンアメリカ司牧」の担当司祭となり、その後、任期付きのサポート司祭から京都教区司祭となった。

2011年1月から英語のミサが始まり、現在のミサの時間割表3の通りになった。そして英語のミサに加えて2017年8月から日系フィリピン人の増加に伴いタガログ語のミサを開催するようになった。5言語のミサ、そして子どもや青年が準備するミサなど毎週行われ、ミサ前に行われる子どもの集いに参加する子どもたちは毎週多言語のミサに参加している。そして、例えばスペイン語のミサであっても、他の国の信徒、ブラジル人、ベトナム人、日本人、フィリピン人も参加している。

2017年から教会の司祭が変わり、アメリカ国籍を持った「エルサルバドル」出身の司祭が主任司祭となり、スペイン語、ポルトガル語、日本語と英語のミサを担当している。この司祭はアメリカへ移民して、アメリカで司祭となり、司祭として5年間フィリピンで働いたり、司祭自身移民者としての経験もある。

数年前から「研修生」の在留資格を持ったベトナムからの若者が少しずつ増えるようになって、2014年に「ベトナム語、日本語とローマ字のミサの典礼」を準備し、2017年から毎週のミサで利用する「聖書と典礼」を日本語、スペイン語、ポルトガル語、英語に続いて準備した。しかし、ミサに参加するベトナム人は約10人であるが、ベトナム語でのミサはベトナム語を話す司祭が不在のため行っていないが、黙想会のためにベトナム語ができる司祭を招くなど、年に数回の開催を考えているようである。



図1 上野カトリック教会 入口看板



図2 5カ国語の聖書と典礼のリーフレット

表3 上野カトリック教会の多言語ミサの時間割

ミサの言語と時間	土曜日	日曜日	金曜日
スペイン語	第1土曜日 19時半		第1金曜日 19時半
ポルトガル語	第2土曜日 19時半	第3日曜日 11時半	第1金曜日 19時半
日本語		毎週日曜日 9時	
子どもと共に捧げるミサ	第3土曜日 19時半		
青年と共に捧げるミサ	第5土曜日 19時半		
英語	第4土曜日 19時半		
タガログ語		第4日曜日 11時半	

V. 子どもへの信仰教育

現在、伊賀の上野カトリック教会では、子ども向けのクラスが3クラスあって、集まっていた子どもはブラジル・ペルー・フィリピンのルーツのある子どもが最も多かった。日本語で行っていた一つのクラスに、日本語を話せない子どもたち（再来日したばかり、またはブラジル人学校に通っている子どもたち）が数名いて、その子どもの横に日系ブラジル人の大人が通訳をしていた。また、各クラス担当は日本人とブラジル人であった。日本語が不十分な子どもたちへのバイリンガルサポートが行なわれていた。

子どもたち同士のリングフランカは日本語であるが、母語も話せるバイリンガルの子もいる。子ども教育に関わっている信徒の語りでは上野教会の多文化について「(省略) 子どもたちを見ると、肌の色は関係ない、国も関係ないし、言葉も関係なくみんな遊んでいるね。日本語でしゃべれる子は日本語でしゃべってるし、でも日本語が弱い子どもたちがいたらすぐにちょっとポルトガル語とかスペイン語とで話しかけてあげるし、子どもたちの中では差別とか、何も考えないね」と語っていた。この語りから子どもたちが日本語を共通語とするが、日本語を話せない他の子どもたちに対応したり、国籍や言語を超えたトランスナショナルアイデンティティを持てるようになっていないかと考えられる。教会はそうしたミックスルーツを持つ子どもたちに保護者から受け継いだ文化、アイデンティティを受け入れ、他の子どもたちと共有したり、国籍の枠を超えたアイデンティティ作りのための役割を果たしているのではないかと考えられる。

勉強会の全ては日本語で行うが、スタッフは日本、ブラジル、ペルー、フィリピンの信徒がいて、子どもたちや保護者が抱えている問題、家庭の多様性や構成が理解されている。普段公立学校でマイノリティーとして、学習の遅れを体験したり、評価されにくいこともあるが、教会での奉仕活動を通して、また同じ外国にルーツを持ってい

る仲間がいることで自信を持てるようになったり、教会への所属感、居場所として毎週集ったり、友達を連れて来たりすることもあるようだ。三浦（2015）は、「親に連れられ、お客さんとして座って礼拝に参加するだけでなく、自ら積極的に関与することが継続的に教会に通う要因となっている」と述べている。

こちらの教会の子どもたちは毎週土曜日が5時に集まったり、少し遊んだりした後、一つのカトリックの秘跡である初聖体の準備するためのクラス、その秘跡を受けた子どもたちは、小学校高学年や中学生のグループに参加したり、聖書の勉強をしているクラスや、聖歌隊に入っている子どもたちはギターの実習をしたり、ミサで歌う賛美歌の練習をしている。また小さな子どもたちに大人の信徒が絵本や紙芝居をしている時があれば、中学生が小さな子どもたちの信仰教育に関わっていることもある。又夕方からミサ後までの長時間 教会にいる為、有志のお母さんが軽食の準備をしている様子が見えた。

他の教区の実態を知るために、担当の司祭やシスターに話しをする機会があるが、関東でスペイン語圏ラテンアメリカ司牧、主にペルー共同体をサポートしているシスターの語りでは、スペイン語のミサに出ている子どもたちがミサの途中で「ママ、いつ終わるの」とつまらなさそうにしている子どもたちを見て、「子どもたちが日本語の方が得意であるため、たまに、子どもたちのために日本語のミサに出る努力をしなければならない」と訴えていた。筆者が見たケースではスペイン語やポルトガル語のミサのみたままに参加する家庭の子どもたちにとって教会に行くのは退屈で、行く意味も分からず、中学生になっても教会に行かない、信仰を持たない子どもになり、無理をしてクリスマスや復活祭のようなイベントに参加している状態となる。

教会に秘跡を受けるために保護者が送り迎えしたりするが、秘跡を受けてから、教会を離れる子どもも少なくない。そのため、保護者がもっと教会に参加するように、継続的な関わりを持つようになることが課題となっている。

一方筆者らが行ったアンケート調査では、「子どもたちに同じ宗教を受け継いで欲しいか」という問いかけに対して、84%は受け継いで欲しいと答えた。これは教会に来ていた信者だけの調査ではなく、伊賀市に在住している一般のブラジル、ペルー人であるが、高い数値となっている。

子どもに同じ宗教を受け継いでほしいか？

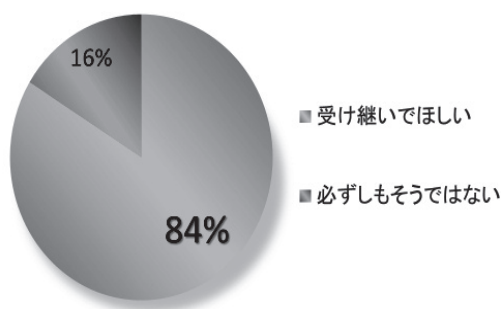


図3 子どもに同じ宗教を受け継いでほしいか

子どもの宗教教育にどう取り組むか？

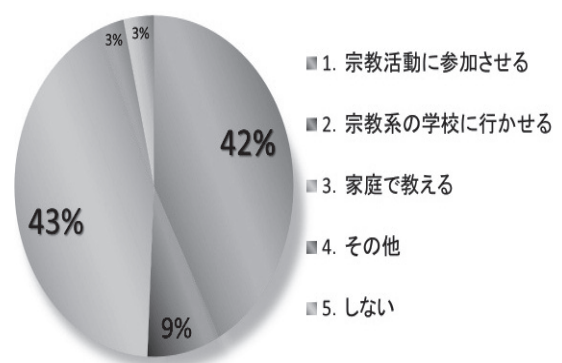


図4 子どもの宗教教育にどう取り組むか

生活のために宗教に関わるのが大事だと思うか？

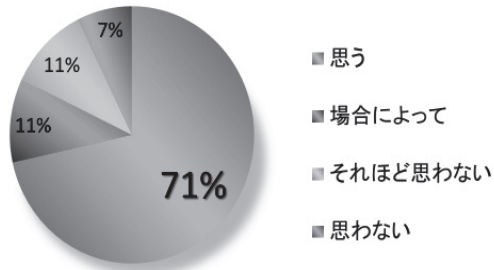


図5 生活のために宗教に関わるのが大事と思うか

どれくらい宗教に関わるか？

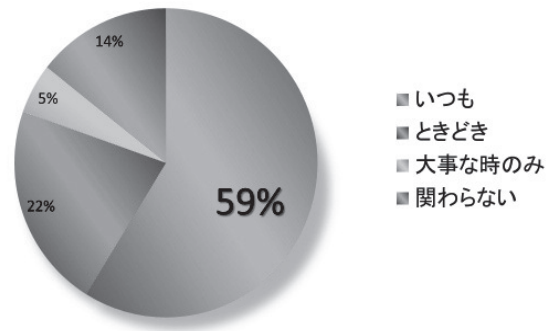


図6 どれくらい宗教に関わるか

また、子どもの宗教にどう取り組むかでは、「宗教活動に参加する」と答えたのは、42%であった。「宗教系の学校に行かせる」のは9%で、「家庭で教える」と答えたのは43%であった。

このデータを見ると子どもの信仰教育に関心を持っている人が多く、「宗教活動に参加する」と「家庭で教える」と答えたものは85%である。

この結果から、ブラジル・ペルーの親は子どもたちに「宗教を受け継いで欲しい」と希望を持っている保護者は多いようだ。

また保護者自身では、「生活のため宗教に関わるのが大事だと思うか」を問いかけたら、71%は「そう思う」、11%は「場合によって」と答えられ、「どれくらい宗教に関わるか」は「いつも」と答えたのは59%で、「時々」は22%、「大事な時のみ」は5%で、「関わらない」は14%であった。ここでは「宗教」としてカトリック教会のみを示しているのではなく、他のプロテスタント教会や、新福音派教会などを指している。

このデータを見ると、在留ブラジル・ペルー人にとって宗教に関わるのが大事であって、81%の者は、「いつも」、または「ときどき」何らかの宗教に関わっていると言える。しかし、これはミサや礼拝に参加するのみであるか、または教会での活動に関与するまで当てはまるかどうか分からない。ブラジル人、ペルー人の中に洗礼を受けているけれど、教会に実践的に関わらない者も多い。そのため、カトリックの場合、洗礼や初聖体と言ったカトリックの秘跡を受けるために子どもたちを教会に連れていくが、その準備期間が終わると教会を離れる者も少なくない。

VI. 終わりに

これまで日本の「カトリック教会」が「難民移住移動者」の受け入れ、サポートを日系ブラジル、ペルーのニューカマーだけでなく、70年代からインドシナ難民の受入れ、ベトナム難民たちへのサポートやフィリピン人女性への支援も行ってきた。また「日本の教会は、けっして日本人だけの教会ではありません。」と日本の司教団が93年から共生を求めて日本の教会や信徒に呼びかけている。しかし、その実践や対応は教区、小教区によって異なる。

本研究では、多国籍の信徒が集う伊賀市内にあるカトリック教会を対象にして、そこで行っている対応、多言語ミサの実態やコミュニティ形成の歴史について調べた。そして活発に行われている子どもたちの信仰教育を通して、日本の教会を目指している「国籍を越えた神の国」つまり、国籍や言葉が異なっても同じ神の子どもとして「一つ

の共同体」である、「信仰」という共通性を持った仲間が集う、異なるルーツを受け入れ、移民二世代である子どもたちのトランスナショナルアイデンティティを獲得できる役割を果たしているのではないかと考える。

この教会の歴史を通して、カトリックの司祭がニューカマーを受け入れるために、新たな言語を学んだり、ブラジル、ペルーの司祭を招聘したり、教区や修道会の司祭の働きかけを見ることができた。ブラジルに渡った日本人がブラジルのカトリック教会に適應するため、実際日本からカトリックの司祭を招いてブラジルの日本人共同体の適應や信仰教育、共生に向けて大いに働いたと報告されている（新谷2015）。同じような取り組みを日本の教会が行っている。

このようにカトリック教会は多岐にわたる支援を通して、在留外国人の母語継承、文化、アイデンティティが保てる場、また他の文化との接触、交流できる場を与える役割を果たしているのではないかと考えられる。

日本、ブラジル、ペルー、フィリピン、ベトナム等の様々なエスニック集団が定期的に交流できる場としての教会には、文化の違いによる葛藤、外国人側からの教会の管理への積極的な関与がないなど、課題が多い。しかし、様々な異文化交流を通して共生を目指していると言える。今後教会がどのように変化していくか、他の小教区や他の教区で行われている活動や実態を調べ、日本のカトリック教会における多文化共生や子どもの信仰教育を通して、母語・文化継承をどのようにされているのかについて続けて調べていく。

【参考文献 (References)】

- Althoff, Andrea, Religious Identities of Latin American Immigrants in Chicago: Preliminary Findings From Field Research. Religion and Culture Web Forum, 2005.
- Althoff, Andrea, Migration and the Transformation of Latino Religious Identities in the US (Lecture presented at Calvin College, Grand Rapids MI), 2007.
- 文化庁文化部宗務課「在留外国人の宗教事情に関する資料集」－東アジア・南アメリカ編－（文化庁「平成25年度宗教法人の運営に係る調査」委託業務）平成26年3月
http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/zairyugaikokujin/pdf/h25chousa.pdf
- Espinosa, G., Elizondo, V. and Miranda, J. (eds), Latino Religious and Civic Activism in the United States. Oxford: Oxford University Press. 2005.
- 樋口直人, 1998, 「在日ブラジル人と日系新宗教」『一橋研究』23(1) 一橋研究編集委員会。
- 星野壮, 2016, カトリック教会による在日ブラジル人信徒への対応: 『カトリック新聞』の記事を中心にして 2: 23-50 「宗教と社会貢献」研究会
- Menjívar, Cecilia, Religion and Immigration in Comparative Perspective: Catholic and Evangelical Salvadorans in San Francisco, Washington, D.C., and Phoenix, Vol. 64, No. 1), pp. 21-45, 2003
- 三浦綾希, 2015, 「ニューカマーの子どもと移民コミュニティー二世代のエスニックコミュニティ」勁草書房
 日本カトリック司教協議会社会司教委員会 「国籍を越えた神の国をめざして」改訂版 2016カトリック中央協議会
 額賀美紗子・三浦綾希, 2017, 「フィリピン系ニューカマー二世代の 学業達成と分岐要因－エスニック・アイデンティティの形成過程に注目して」和光大学現代人間学部紀要
- Pew Hispanic Center. "Changing Faiths: Latinos and the Transformation of American Religion." April 25, 2007, Nov. 14, 2007.
- Reitz, Jeffrey G., Rupa Banerjee, Mai Phan, Jordan ThompsonRace, Religion, and the Social Integration of New

Immigrant Minorities in Canada, 2009.

新谷光 アルベルト, 2015, 「ブラジルの日本移民とカトリック教会の社会的役割」移民研究年報 第21号

白波瀬 達也, 2012 「カトリック教会による滞日外国人への支援(多様化する現代日本の「移民と宗教」の理解に向けて, パネル, <特集>第七十回学術大会紀要) 「宗教研究」85巻 4 輯

Shoji, Rafael, Religiões entre Brasileiros no Japão: Conversão ao Pentecostalismo e Redefinição Étnica, REVER Revista de Estudos da Religião, 2008.

高畑幸, 2000, 「バイカルチュラル・アイデンティティの構築に向けて－日比家族の二世代の事例から」『市大社会学』1: 24-36. ————. 2016 「フィリピン系日本人－10万人の不可視的マイノリティ」駒井洋監修『マルチ・エスニック・ジャパニーズ－〇〇系日本人の変革力』pp.154-167 明石書店.

山田政信 2008 カリスマ刷新運動－プロテスタントの伸展に抗うブラジル・カトリック教会－ ラテンアメリカ・カリブ研究 第15号, 37-46頁 [研究ノート]